

熱帯多雨林における集約的森林管理と森林資源の高度利用による 持続的利用パラダイムの創出

実施機関：京都大学（研究代表者：神崎 護）

実施期間：平成 22 年度～平成 24 年度

プロジェクトの概要

インドネシアの低地熱帯多雨林を対象として、集約的な森林管理と高度の林産物利用を実現することで、持続的な熱帯林利用を可能にし、REDD プラスに結びつく新しい天然林保全のパラダイムを創出する。

リモートセンシングと地上調査によるモニタリングに基づく適応的森林管理方法の確立、新技術の導入による森林資源の高度利用技術の開発、伝統的資源の活用による地域社会の発展モデルの構築を 3 年間の目標とし、これらを有機的に組み合わせた林業システムの構築を提言する。

(1) 評価結果

総合評価	目標達成度	成果	計画・手法の妥当性	実施期間終了後における取組の継続性・発展性
A	a	a	a	a

総合評価：A（所期の計画と同等の取組が行われている）

(2) 評価コメント

本プロジェクトでは、インドネシアの林業企業と連携し、実装モデルとして、同社が目指す“環境問題に配慮した森林資源の高度利用を伴うサステナブルな森林管理”に実際に反映し得ることを念頭において、その取組を推進したことは評価できる。さらにこうした観点のもとに、年に 2 回余り定期的にかかれた研究会議・ワークショップで情報交換に努めるとともに、計画や成果に関する討議を深め、フィールド調査他の共同活動・共同研究実施を通して、継続性を有する参画機関及び研究者・関係者間の連携ネットワークを確立・強化したことも評価できる。

今後は、長期にわたり研究を継続して、現地の行政や林業企業の営林活動に本プロジェクトの成果である環境モニタリングの実施技術等を定着させることを期待する。

- ・**目標達成度**：遺伝的多様性から地域住民の生活環境の把握保全まで、広範に渡る多様な研究・調査を行い、熱帯林の利用について、様々なデータを蓄積し提示しており、所期の目標は達成されていると評価できる。

- ・**研究成果**：中央カリマンタンの択伐林において、リモートセンシングによるバイオマス量のモニタリング、動植物の多様性や土壌炭素量のモニタリング、持続的生産システムの構築、熱帯産木材の高度利用技術の検討などを行い、さらに加えて、地域社会の発展モデルの構築も行って、集約的かつ持続的林業展開による REDD プラス推進の可能性を示したことは評価できる。

- ・**計画・手法の妥当性**：インドネシア若手生態研究者をコーディネーターとして雇うなど、事前に周到に準備して実施された計画であり、インドネシア現地の林業会社との連携も有効であ

ったことから、実施された計画・手法は妥当であったと評価できる。

・**実施期間終了後における取組の継続性・発展性**：採択された文部科学省の世界展開力強化事業支援に基づき、ガ ज्याマダ大学との大学間交流協定締結をベースにおいて、連携活動及び研究者育成への取組が発展的に継続展開しており、今後、学生教育を含めた連携進展に期待する。